



よさこい鳴子踊進化論序説

岩井, 正浩

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 8(2):211-224

(Issue Date)

2001-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000429>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000429>



よさこい鳴子踊進化論序説

岩 井 正 浩

The Evolutionism of 'Yosakoi Naruko Dance'
(Yosakoi Festival in Kochi, JAPAN): An Introduction

Masahiro IWAI

1. はじめに～高知県の2つの祭り

＜都市の祝祭＞という美しく聞こえる言葉がある。この＜祝祭＞には、＜いわいとまつり／いわいのまつり／祝日と祭日＞（広辞苑第4版 1995）という意味がある。一方では、R. ワーグナーのオペラに通じるような、西洋のリズム感に縁取られた、どこことなくバターくさい匂いが私を包んでしまう。＜祝祭日＞となると、＜旧制で国家の祝日と皇室の大祭日との併称＞（広辞苑第4版）という意味にもなる。高知市におけるよさこい祭は、地方の中小都市に生まれた祭りではあるが、その原点は＜祝祭＞などというイメージを感じない土臭い日本の祭りである。戦後の一時期、日本各地でさまざまな祭りが誕生した。東京都の高円寺阿波踊は土臭さを全面に出した＜バカ踊＞から端を発している。高知市のよさこい祭もまた戦後に誕生した都市の祭りであった。

1987年から実施した高知県西部の＜四万十川上・中流域のくらしと音楽＞調査^(註-1)は、過疎地の住民たちが主体的に自分たちを位置付け、自分たちの川と生活を守りそしてコミュニティーの存続・発展を願って行なわれる祭りを対象とした調査・研究であった。彼らもまた新しい祭りを創造したが、その祭りはさまざまな理由で離村した旧村民と都市住民（まれびと）を招聘し、自分たちのアイデンティティーを確認する意味もこめられていた。高知県十和村の四万十川まつりはその典型である。^(註-2)

高知県は1990年から＜人口自然減＞として全国的にも＜過疎のモデル県＞となった。1994年からは社会増となったが、これは不況で大都市集中が鈍くなったためで、高知市一局集中が進んだ。^(註-3)人口約80万人は神戸市の2分の1強でしかない。そしてその3分の1以上が県都の高知市に集中している。これは日本における首都東京と類似した人口と文化の一局集中化の姿である。東京都に全国の地域住民が集中したのは昭和30年代の高度成長政策期であった。^(註-4)それは故郷の祭り（諸々の民俗・年中行事）から離別した地域住民がさまざまな文化を抱えて混在している状況を呈した。何かのきっかけがあれば、それは融合し再創造された新しい文化を立ち上げる潜在的な力を有してもいた。東京都に現在、テレビのキー局すべてや多くのオーケストラが集中していること、プロ野球12球団の半分やサッカーチーム（Jリーグ）が関東圏に集中していること、数多くのイベントが企画・実行され全国に発信されていることなど論を俟たない。高度情報化・サテライトは、リアルタイムで東京の文化・風景・言語・習慣・人間の諸行動を地域に伝達している。そこには一方的で選択肢のきわめて少ない情報が地

*神戸大学発達科学部音楽表現論講座

(2000年10月30日 受付)
(2000年11月8日 受理)

域住民に押しつけられている現象を生み出している。

地域における祭り・民俗芸能・年中行事は衰退・断絶の憂き目に曝されている。一方では都市住民のための支援基地として生活物資の生産や、原子力発電所を抱えて電力を供給しているばかりではなく、産業廃棄物やゴミまで背負わされてきている。地方の中小都市である高知市を始めとする地域に残留した住民は、彼らのアイデンティティを確認するため新しい祭りを立ち上げ、粘り強く進化させ大都市住民にも発信してきた。それは大都市住民に迎合した祭りではなく、あくまでも自分たちを率直に表現したいという身体全体からのパフォーマンス欲求だったと言える。

日本には数多くの祭りが伝承されてきた。そして新しい祭りもまた創造されてきた。高知県十和村には四万十川まつりが生まれたし、県都高知市でもよさこい祭が誕生した。このよさこい祭は他の祭りと大きく相違する特徴をもっている。それは毎年、踊り・音楽・衣裳を創造しているチームが圧倒的に多いということである。つまり進化をし続けている。一方で、誕生当時の47年前と同じ踊り・音楽・衣裳を伝承しているチームもパラレルにパフォーマンスをし続けてきている。このよさこい祭は、札幌にわたりYOSAKOI ソーラン祭となり、その後全国に伝播しそれぞれの顔をもつ祭りを立ち上げてきた。そしてそのベースにはよさこい祭の基本的コンセプトである①《よさこい節》を挿入する（他地区ではその地区の民謡を挿入する）、②鳴子を持つ、がある。よさこい祭は、単なる都市の祝祭レベルではなく、きわめて特異な進化を経てきている祭りである。そこには日本の伝統的な祭りに見られる信仰は欠落し、鎮守の杜や寺の境内がパフォーマンスの場ではなく、都市の〈街〉、中でも道路が舞台となっている。伝統的な阿波踊やエイサーも道路を舞台としたパフォーマンスが行なわれてきた。よさこい祭はそれをさらに進化させ、音響機器やさまざまな表現手段を駆使して祭りを盛り上げている。そしてそれらは固定化・様式化を拒否して常に変容・進化をし続けている。

本稿は、よさこい祭、なかんずくよさこい祭を構成するよさこい鳴子踊を、新聞・文献およびフィールドワークから考察し、その進化を明らかにしようとする研究の序説である。

2. よさこい祭の誕生と武政英策

2-1. よさこい祭誕生の要因

1954年に高知商工会議所は、阿波踊に触発されて新しい祭りを創造するために5点の骨組みを立案した。それらは

- ①商工業振興だけでなく市民のためのお祭りとし、会議所と高知市が共催する
- ②1回かぎりの祭りに終わらずに、阿波踊りのように永続発展させる
- ③新よさこい踊りその他にこだわらず、新しい時代にふさわしい、新しいものを作る
- ④名称は市民生活に溶け込んでいるし高知にふさわしい「よさこい」を生かし、『よさこい祭り』とする

- ⑤開催の時期は将来を考えて阿波踊の前とする^(註-5)

に集約できる。当時の高知県は戦後のインフレ、昭和24年の1ドル＝360円の単一為替レート設定による輸出の不振と増税、水稻のイモチ病被害などが重なっていた。一方で〈南国博覧会〉と〈高知市制施行60年〉というイベントが企画されていた。このイベントを戦後の山積した課題克服のためのカンフル剤に位置付けようとしたのが高知商工会議所で、「博覧会を単なるお祭り騒ぎに終わらせることなく、地域住民の喜び、しあわせを生み出すチャンスにすること」と「地域の発展なくして商工業の発展なし」という一貫したスタンスが打ち出されていた^(註-6)。土佐人ならではの南国的楽観性・プラス思考が祭りの創造に大きく寄与したことは想像に難くない。

昭和25年3月に開催された〈南国博覧会〉には高知県内各地に伝承されている数多くの民俗芸能が

出演し、「芸能館」ではそれらが競演し大人気を博した。そしてその中に登場した踊りが新しいよさこい踊で、熱狂的に受け入れられた。ただその踊は従来のお座敷踊りであるよさこい踊を新しい時代の誰でも楽しめる踊りに再創造するために日舞5流派が共同で振り付けをし、誕生させたものであった。^(註-7)この年の12月高知商工会議所は「経済の安定と商工業者の発展に一層の決意を固めるため」として戦後第1回の<商工まつり>を開催した。その時に新よさこい踊で踊り子隊を編成し、街頭出演を実現させている。これらの中にはその後のよさこい祭につながる重要な要因が生まれている。それらは①民俗芸能が競演の形で人気を博したこと、②新しい踊りを再創造し《新よさこい踊》を誕生させたこと、③そのイニシアティブを高知商工会議所が発揮したこと、そして④街頭出演、である。

高知商工会議所は<南国博覧会>後をにらんでいた。一時的興行ではなく、永続的に発展させること、そのモデルとして常に脳裏にあったのが隣県徳島の阿波踊であった。1953(昭和28)年には高知商工会議所の有志による阿波踊見学が行なわれた。不況の中でも踊り一色に沸き立っている徳島市内、そして高知市が本店の四国銀行が揃いの装束で踊っているのを見て、構想が組み立てられていったと考えられる。<よさこい踊り子隊>も阿波池田町に招待された。そこで、賑やかで力強いリズムの阿波踊に圧倒され、やさしくお座敷的なよさこい鳴子踊を新しい踊りの型に改造する構想が打ち出された。それは「夏の日差しのもと、よさこいで町中を一気に沸かせ、高知の新しい顔にしよう」(1954年、高知商工会議所観光部会)^(註-8)であり、これが現在のよさこい祭の原点となり、同年8月に第1回よさこい祭が開催されたのである。

阿波踊そのものには土佐人に共通するもの=陽気さ・熱気・自由さ、があった。よさこい祭につながる要因としてはさらに⑤<連>としてのまとまり、⑥男踊りに見られる自由なパフォーマンス、⑦夏の暑い時期に数日間踊り狂う設定、⑧コンテスト審査方式、や⑨他県を巻き込んだ踊りの構築など、よさこい祭に与えたインパクトははかりしれないものがあつた。ただ、初期の踊りは市民にとって非常に馴染みの薄いものであり参加者も少なく、規模も当初目指した「阿波踊に匹敵する街頭踊り」には遠い、民謡調の舞台踊りに近い形式であった。第20回大会頃までの衣裳は浴衣に鳥追い笠、利久下駄、振り付けは正調(盆踊り風)、お囃子も太鼓や三味線が主流で、競演場ではテープに合わせて踊るというスタイルが一般的であつた。^(註-9)

2-2. 武政英策の登場

《南国土佐を後にして》(1959年大ヒット)の作曲家として、また高知県内の著名な民謡研究家であつた武政に、新しいよさこい祭の音楽の作曲依頼がされたのは、第1回開催の1954年6月(開催時期を阿波踊前の8月10-11日の2日間と決定したのは4月)であつたが、武政は承諾した。その時のことを武政は「実は市民の健康祈願祭で踊りのようなものをやりたいが、民衆にヒットするようなものを考えてほしい。しかも5日間^(註-10)で」と回想している。武政は伝統ある阿波踊を意識し、そのためには素手ではなく<鳴子>を両手に持って踊ることを考案する。<鳴子>自体は稲の二期作地帯である高知のイメージとしては大いに意味のあることだとした。この発想はユニークであり、今日のよさこい祭とその伝播地でコンセプトの1つとして生き続けている。

踊る形態に関しても阿波踊をヒントとし、同時に対抗手段を考案している。「阿波踊りは単純なデモンストレーションにすぎない。それならこちらはメーデー式のジグザグ行進でいこう^(註-11)」とし、その上でジグザグ行進に鳴子を入れる方法として行進時に直線的に打つことと曲線的に回すことを組み合わせた。この手の動きは阿波踊や南西諸島の踊りにみられる手の動きから東南アジアに通じる<こねり手>の応用が見られ、無意識的ではあるが黒潮ラインにおける共通性も内包されている。^(註-12)

歌詞の着想は、当時研究中であつた<土佐わらべ歌>にヒントを見出だしている。武政はよさこい祭を郷土芸能の一つと位置付け、「郷土芸能は、民衆の心の躍動である。どこの誰べえが作ったかわ

からないものが、忘れられたり間違ったりしながら次第にカドが取れ、シンプル化していくものである。要は民衆の心に受け入れられるかどうかが問題で、よさこい鳴子踊^(註-13)にしても、これからどんなに変わっていても構わないと思っている」と述べている。このコンセプトもよさこい祭の進化に大きく関わっており、シンプル化ではないにしても年々新調され、今までとはまったく違った概念の郷土芸能を育ててきたのである。

3. よさこい鳴子踊の構成要素

よさこい祭の<よさこい>の意味については諸説あるが、「夜に來い」「今宵いらっしゃい」が一般的である。

進化を続けるよさこい鳴子踊には4つの構成要素が相互に強く結びついている。新しい踊りの創造の基本は、原点＝正調（成立時のスタイル）に常にフィードバックをしながら、また捉え直し、核を内包させることにある。よさこい鳴子踊は47年の歴史をもつ。戦後の祭りで歴史は短いともとれるが、新しく創造されつつある全国のよさこい祭や、YOSAKOI ソーラン祭と比較すると大きな相違がある。それは原点が歴然と存在することである。正調とされる踊りの音楽・衣裳・踊りそして第4回から登場した地方車は、47年間進化の中でさまざまなスタイルが共存する踊りとなっている。これは他の戦後の踊りには見られない。踊り子の世代やジャンルも構成要素として注目される。幼稚園、子ども会の幼児から、46回大会で初登場した高知市老人クラブ連合会「高知シニア」は64～94才までの幅広い世代、また児童福祉施設「子供の家」（第10回）、「県ろうあ協会チーム」（第31回）や障害者チーム「てんてこ舞」（第46回）といったバリアフリーを目指したチームも参加を果たした。

第3節ではよさこい鳴子踊の構成要素を、『よさこい読本3号・7号』および高知新聞（1996年8月7日）の記事にに基づきながら構成・論述する。

3-1 衣裳

伝統的で基本的な衣裳は、サラシを腹に巻き法被をかけるといったシンプルで清潔感のある型である。その発展型は、法被の形を残しながらもそのデザインはトレンドを盛り込み、その法被でチームカラーを主張している。3つ目は、法被を脱してオリジナルの衣裳にしながら、色彩や型を日本的なものを感じさせる創造＋日本調型、原色の型をふんだんに使った派手さで押すのではなく、センス良くまとめた衣裳が多く、お洒落さを感じさせる型である。4つ目は、衣裳の型やデザインをオリジナルとした時代のトレンドが一番反映しやすい創作＋トレンド型。これはチームカラーを全面に打ち出した衣裳で、若者中心のチームが志向する個性的な衣裳である。^(註-14)衣裳を制作している泉真弓は「衣裳はチームの顔。第一印象の六割ぐらいは衣裳で決まるのでは」とし、「ただ目立つだけの衣裳はおしゃれとはいえません。そこを抑えながら、感じのよさを出すのが本当のおしゃれ。衣裳にヘアメイク、音楽、踊り、地方車まで、全体の調和が一番大事。その一体感があって初めて、チームとしての迫力や厚みが出る^(註-15)」と語っている。

衣裳の歴史を第33回（1986年）前頃から見ると、「いろはにほへと」チームが古典的なスタイルを破り、手染めの腹掛けとフラフ（岩井註：vlag＝旗）を使用したパンツを採用した。当時の衣裳は法被とパンツが主流で、着物業者が制作していた。第36回頃からは和風を基調にしながらも、デザインに遊び感覚を採り入れたチームが増加し、それとともに衣裳を作るのも着物から洋服業者に移行した。第38回頃からはパンク系の衣裳が目立つようになる。第40回頃からはエスニック系の衣裳が出現し始め、生地価格が安い東南アジアでの現地制作するチームも出てくる。さらにエスニック系の流れにやや遅れて現代風の味も加えた和風のチームが増加してくる。^(註-16)

衣裳の一般的な制作過程は～①各チームの実行委員、よさこいプロジェクトの担当の者との打ち合せ。デザイン画を持ち込んでくる場合には全体のバランスから手直しをする場合もある。②方向が決定したら、コンセプトを元にコーポレートカラーやテーマを盛り込んでパソコンでデザインに取りかかる。③生地見本は毎年開かれる展示会で下見をしておく。生地にも流行があるため昨年と同じ生地の注文がある場合には対応できないこともある。特殊な生地は高価なため予算の都合がつかないとしわ寄せがくる。④デザインが完成したらパタンナーに発注する。約1週間で実物どおりのものが完成。⑤サンプルができたなら実際に着てもらって判断する。型紙の善し悪しで完成度に大きな違いが出る。⑥納品時にハチマキの角度、帯の止め方など「着こなし方」を細かく教える。すべてをきちんと着たときがカッコイイが、自由な着こなしが大半であるため製作者が悲しむこともある。⑦祭り当日、納品した先にはかならずチェックに行く～である。

3-2 地方車

地方車（じかたしゃ）とは、踊り子を先導していく車である。そもそも＜地方＞が「舞踊で＜立方＞に対し音楽を受け持つ人々」（広辞苑第4版）を指しており、よさこい祭では「踊りの伴奏としてのPAや生バンドなどが乗り込む車」という意味となる。地方車には多様なバンドやさまざまな楽器などが積み込まれており、基本的には4つの型に分類できる。1つ目は企業名、団体名が打ち出されている。2つ目は同じ企業名が中心でも、そのチームの今回のコンセプトを中心に作られたもので、企業ポリシーのPR、衣裳・音楽などよさこいのコンセプトに合わせたものなどである。3つ目は企業でない商店街・学生などのチームの地方車で、参加することに意義を見だし、心から楽しむことを目指している。4つ目は地方車自体が移動するコンサートホールとなっていて、バンドが自分たちの演奏そのものを強烈にアピールする、「目立ちたい者を目立たせる」というよさこいの特徴をいかなく発揮している型である。1980年代からはバンド演奏の地方車^(註-18)が出現している。

地方車の一般的な制作過程は～①注文を受けた時点でイメージを打ち合わせる。②イメージが決定したら実際にスケッチをして形にする。③OKのサインが出るまでデザイン案のやりとりをする。④デザイン、広告が決定すればそれぞれのパーツをカッティングシートで切り出す。地方車は表面積が大きいので、何度もシートを切る。トラックレンタルなどの関係から（リース料がかかるから必然的に祭り前日に制作日が重なり、いくつかのチームを引き受けると）集中的に多忙となる。⑤あらかじめ室内で各パーツごとに造っておき、トラックが到着次第、一気に仕上げる。⑥組み立てる手順は、地方の骨格となるパイプを組む→屋根、左右部分をはる→照明などを取り付ける。先にPAを取り付けるかはケースバイケース～である。地方車はチームの顔であり、数台の巨大なPAを設置し大音響を発する音源でもある。車上での踊り、生演奏、統括も見所の一つである。

3-3 踊り

正調といわれる成立当時から堅固にそのスタイルを守ってきているチームに「高知市役所チーム」、「高知県庁チーム」や「四国銀行チーム」などがある。1970年代は《よさこい節》を基調とした太鼓・三味線を伴奏楽器としていた。1980年代に入ってサンバ調が導入されるとよさこい鳴子踊は急速に正調から自由な踊りに進化を始めた。そこには音楽とともに世界中の様々な踊りが展開されるようになった。第19回大会（1972年）からは直進行進からジグザグ行進と8の字の動きが加わり、以後の踊りに影響を与えていった。時久恵子は振り付けについて、「曲のテープを繰り返し聞き、その曲に乗って、百人、百五十人がいっせいに踊るところをイメージします。イメージがわいたら今度は振り付けの流れをイラストします」と語っている。完成には大体1週間から10日、イメージが沸かない場合でも2週間の時間で仕上げている。工藤理恵はイメージがわからない時には、「音楽の担当者と話し合っ

て、曲を変えてもらうこともあります～振り付けしやすいのは、起承転結のストーリーがある曲。その逆に、単調な繰り返しが多い曲は難しい」とし、和風傾向について「ジャズやファンクの場合、踊る側だけでなく、見る側にも年齢制限ができてしまう。和風の踊りなら、子どもからお年寄まで、すべての年代の人が見て楽しむことができる～和風がメインデッシュで、新しいものがおかず。こんな形がいい」と歓迎している。^(註-20)

踊りの一般的制作過程は～まず①テーマに合った音楽が必要不可欠で、依頼を受けたチームの実行委員の方と何風の踊りでいくかで綿密な打合せをし、テーマを決定する（和風、サンバ調、ロック調、アフリカン等々）。はっきりしたイメージをもっていないチームには提案をして踊りの方向性を決定していく。決定すれば音楽制作の方に制作の依頼を申し込む。②テーマの踊りをビデオで研究することもある。③音楽が完成したら、十分に聞き込み制作に入る。実際に動く→描くという作業を繰り返して形にしていく。④イメージが固まれば、次々にメモしていく。⑤振り付けが完成すればインストラクターに渡す。大体7名くらいがチームに教えに行く。時には2～3チームの掛け持ちもあるため祭りが近づく就多忙さを増す。⑥よさこい当日はチームと一緒に踊る～である。^(註-21)

3-4 音楽

武政英策によって《よさこい節》をベースにした《よさこい鳴子踊》が作曲されたのは、第1回の開催直前であった。第4回大会では伴奏がレコードから特別編成のバンドや専門の地方車が登場する。第6回大会の年には武政が作曲し、ペギー葉山の歌った《南国土佐を後にして》が大ヒットする。この歌の中にも《よさこい節》が挿入されていた。これは《よさこい鳴子踊》と同じ技法を用いていて、武政のこの技法は高知市民に限らず全国民に受け入れられたことになる。そして第17回大会（1970年）で、武政はテンポアップの曲にし、和太鼓をサンバのリズムで打つことを考案する。これがその後の音楽の進化に大きく関わっていくこととなる。第23回大会（1976年）ではエレキバンドが登場、第28回では統一音楽であった大手筋本部競演場の踊りが解禁となり自由化が促進される。第29回頃になるとロック調、サンバ調が増加する。第34回頃ではアップテンポが主流となり、ラップ調、ファンキー踊り、レゲエやユーロビートが出現する。第37回ではランバダ、ソウル、サルサなどのリズムが支配的となり、多国籍・無国籍的ともいえる世界の踊り・リズムが席卷してくる。第39回では和太鼓導入チームが増加し和風回帰現象も見られてくる一方で、第47回大会（2000年）にはバラバラも登場した。

音楽のパターンには、①子どもたち中心のグループでは《よさこい節》を基調にした旋律使用、②和太鼓など日本楽器を旋律の中心に持ってきているグループ、これには《よさこい節》の旋律に忠実なグループと、オリジナル（チーム独自）の旋律で演奏するグループに分かれる、③サンバ調のリズム、これにも《よさこい節》派とオリジナル派に分かれる、④ロック調における《よさこい節》を意識した音楽、そして⑤ディスコ調で、チームのオリジナリティーを全面に打ち出したサウンドがある。^(註-22)音楽作りに関して西岡隆宏は、音の変化の最大要因を「アナログからデジタルになったこと、これによって音づくりがコンピューターの打ち込みでできるようになった。世界各地の音楽のリズムなんかも、取り入れやすくなった」ことにおいでいる。たとえば和風では、「アナログの時代は、録音する際、三味線や和太鼓を実際に演奏しなければいけなかった。それが今では、コンピューター入力で、音を割合簡単に入れることができます」と語っている。また堤一平は、「いいチームを作るには、トータルコーディネイトが大切。その中でも、音は重要な位置を占める～＜高知の祭り＞というオリジナル性を考えた結果、よさこい節のメロディーをいかにきれいに生かすか、という基本にたどりついた」と述べている。^(註-23)

音楽の一般的制作過程は～①チームの人と打ち合せ、コンセプトを十分理解した上で曲作りにかかる、②音は全てキーボードで弾くので、リズムが確実な打ち込みとは違い、音に微妙な「ズレ」がで

る。そのズレこそが「味」になる、③全ての音を入力したら、システムをフル活用して編集作業に移る。「コンサート用」ではなく、「おどり」が主役であることを念頭におく。踊りとマッチしている曲は大音量でも不思議とうるさくない、④完成した曲はMDやDATに収録して納品し、前夜祭の現場で音の確認をする～である。^(註-23)制作された音楽はアンプを通して流れる音楽である。さらにこれに生演奏を加えた形、生演奏のみの形もある。第47回大会（2000年）では、高校生が作曲した曲を自転車に乗せたラジカセで流しながら踊った3人娘のチームも登場した。

音楽にとってもう一つ重要な要素に＜鳴子＞がある。二期作地である高知における雀おどしの音具あったものが、朱色に塗られ両手に持って振り鳴らすという民族楽器として位置付けられ、よさこい鳴子踊の必携要件となった。鳴子の一般的制作過程は～①材料となる2mの板（高知県内産の檜）の厚さ・幅をそろえる（耳をつく）。鳴子に合わせた長さ（鳴子によって長さは異なる）にカットし、しゃもじ型にする。②荒削りが終わるとしゃもじに穴をあける。③鳴子に「みみ」をつける。④鳴子の目止めをして鮮やかな色にするために「どぶづけ」を行なう。⑤色付作業はエアガンで塗るが細かい所は手作業で行なう～である。^(註-25)鳴子の色・形・大きさ多様化し進化を続けている。そして全国からの注文も殺到している。

4. よさこい鳴子踊の進化と課題

第1回のよさこい祭では、「高知市民の健康と繁栄を祈願する市民祭」がとり行われている。よさこい祭は実質的には高知市の祭りである。2000年の第47回大会でも圧倒的に高知市内の参加チームが主体であり、高知市以外、なかんずく高知県西部のチームはきわめて少数である。第1回の参加団体は21で750名の踊り子であった。参加団体には早くも「愛宕子供組」の子どもチームが登場し、《新よさこい踊》の誕生に関わった「若柳流連中」も名を列ねていた。また県内各地の伝統芸能の特別出演や在高知徳島県人による阿波踊も登場し、盛り上がりを見せた。ただ、道路使用に関しては警察の承諾がとれず、特設舞台でのパフォーマンスとなっている。東京都の高円寺阿波踊や札幌のYOSAKOIソーラン祭でも、同様に道路使用に苦心の連続があったことが報告されている。

第2回大会では、実施することに意義を見出し、駆け込み実施した第1回大会の反省から見直しをして以下の諸点を決定した。

- ①隊列の前進速度を早めるためのくふうをする
- ②市外からの踊り子隊参加を呼び掛け、鳴子踊り以外の郷土芸能の参加は原則として認めない
- ③当面は踊りの普及に重点を置いて技術審査は行わず、参加旗を贈って表彰に代える
- ④花火大会は最終日とする

第2回大会は30団体、1600人と約倍増となり、一気に進化の様相を呈してくる。

表1は第1回（1954年）から第47回（2000年）にわたる『よさこい祭：出場チーム数』である。よさこい祭はあくまでも高知市民（途中から県民）の祭りであり、YOSAKOIソーラン祭のイベント性とは性格を異にする。それらは、①幅広い踊り子層と3世代にわたるパフォーマンスが確立していること、②正調から、現代の地球規模の音楽・踊り・衣裳を駆使した多種多様な表現と価値観が共有されていること、③それらの制作をほとんど地元で、しかも毎年新調していること、④47年の歴史が高知市民の全体にまで浸透していること、⑤障害者チームの参加が果たせたこと、そして何よりも⑥嬉々とした自己表現（パフォーマンス）に生きていることの確認を見いだしていること、で地元密着型の祭りとして地位を確立していることにある。さらに⑦県外のチームの参加と全国大会が、踊りの輪を全国から世界に発信し、各地で独自の発展をし始め、その連携がはかられてきていることは一地方都市の祭りを超える年中行事に成長したことを物語っている。よさこい祭には信仰の面影はもはやな

い。しかし現代人は、この踊りの中に＜内なる信仰＞を秘めているのではないか。信仰自体も日本における＜八百万の神＞的捉え方で進化を果たしているのかもしれない。今後こういった方向に発展するかは予測だに付かない。ただ市民密着型の踊りであるかぎり、そして47年の伝統を生かしていくかぎり、高知市民の祭りというコンセプトで進化を続けていくと考えられる。

進化するよさこい鳴子踊は様々な問題も生み出してきた。1992年の高知新聞には＜楽しいならいいか！＞という記事が掲載された。そこでは「一万五千元や二万円という高い参加費を、中高生がハイッと簡単に出すのが不思議。それだけみんな踊りたいということなんだろうが、昔は日当もらって踊っていたのに」に見られる参加費の高騰や、踊り子が年々若くなっていくことに懸念を表明している。そして「祭りを支えるのはやはり若い力です。でも『じんばもばんばも』（岩井註：《よさこい鳴子踊》の歌詞の一部）といかなくなったのも事実。“若者だけ”の祭りにならないように気を使ってほしい」や、「他の祭りにはないパワーあふれるダンス。でも正調派もなくなしたくない。正調派が姿を消したらよさこいの意味がない」と主張している。彼らの捉え方には、進化とはオリジナルにつねにフィードバックしつつ、新しい踊りが創造されていくことだとする基本的ポリシーが根付いている。^(註-26)

1995年には、常連のしにせである「万々商店街振興組合」が「あまりにも金がかかり過ぎ、気軽に参加できる市民祭から外れてきた。一度休んでみた」と不参加を表明。苦情の多くは大音響や踊り子のマナーの低さであった。^(註-27) 1997年には＜'97 よさこい総括＞が掲載された。そこでは、数少ない正調踊りを守ってきた「尼崎武善会」が、高齢化などを理由にことし限りで引退を表明したが、そのコメントに「私たちが踊りにくくなった。年取った人が参加できる祭りであってほしい」との指摘がなされた。地元組はほとんどが高知市中心で、郡部からの参加が少ないことも課題とされた。

1998年9月11日、チーム代表や行政、マスコミ関係者ら35名が出席して「四～五年先のよさこいを考える会」が開かれ、祭りのルールや日程問題などさまざまな課題、将来のイメージ、自由度を確保しながらいかに市民の協力、賛同を得るかについて自由に討論が展開された。その中でここ数年漸減傾向にある踊り子に関して「祭りの魅力が何なのかきちんと考えないまま大きくなった。その辺りの詳しい分析が必要」が出され、第50会大会に向けたテーマの整理として検討されていくこととなる。^(註-28)

高知青年会議所（高知JC）とまちづくり市憲委員会は1999年11月、「『よさこい祭り』21世紀への指針～まちとまつりを考える～」を、12項目にわたる＜よさこい祭りアンケート＞などを実施して作成し、よさこい祭り振興協会（入交太二郎会長）に提言した。提言は、①祭りの規模の現状維持、電車通りの競演場は困難、これ以上の派手さへの疑問、などが市民意識としてあること、②仕事や金銭的負担、体力面から踊るのをやめた人が多い、ことなどを踏まえ、参加しやすいチーム形態、踊り子のOB・OGが裏方として参加できる方法の検討を求めている。また、今後の改善のポイントとして、①チームと競演場の関係の検討、②高齢化や人手不足、資金不足の中、運営難が進む地区競演場を支援するため、チームごとに競演場の運営要員を出し合う“フランチャイズ制”の導入、これによって交流の促進、次世代の運営スタッフの養成、OBやOGの活躍の場づくりができる、③交通整理や写真などの記録班、障害者のための補助者など、多くのボランティアが参加できる仕組みづくり、その上で④事務処理が限界を超えていることから、事務局体制を見直し、常設・専任の「新振興会」の設立、を提言している。^(註-29)

5. 伝播・進化～全国への発進基地としての南の民の踊り

よさこい祭は1992年に、札幌市へ伝播しYOSAKOI ソーラン祭として新しい歩みを始めた。日本における民俗芸能・祭りの伝播は、陸路であり、山越えでありそして海路であった。しかし、現代では高度情報化で情報はリアルタイムで発信され、享受される。YOSAKOI ソーラン祭は空路と情報化の時代に誕生した現代の祭りでありイベントであり、北海道大学の1学生（長谷川岳^(註-30)）が1991年のよさこい祭で見た＜セントラルチーム＞の踊りに感動したことがその契機であった。10チーム、1000人でスタートした祭りは急速に発展し、2000年の第9回では375チーム、38000人が参加するまでとなった。そしてこのYOSAKOI ソーラン祭も、よさこい祭と同じコンセプトをもっている。それは《よさこい節》のかわりに《ソーラン節》を導入すること、鳴子を持つことである。このコンセプトはその後、全国各地に伝播・増殖を繰り返していくよさこい祭の基本として機能していく。

表2は、『全国のよさこい祭』一覧である。これ以外にも各地の祭りの中に導入されているケースも多々あり、2001年度は70ヵ所ともいわれ把握すること自体が困難となってきた。表3は第47回大会（2000年）での『よさこい祭本祭参加の県外チーム』、表4は『第2回全国大会参加チーム』である。従来型の都市から地域へといった文化の伝播システムは、よさこい祭の出現で大きく変化した。地方から地方へ、地方から都市へ、といった伝播システムは地方住民のエネルギーとプライオリティーを遺憾無く発揮している。毎年、音楽・衣裳・地方車・踊りを新調し、その制作のほとんどを地域で達成する主体的力量を備えてきたのである。

規模が拡大したことや、多種多様な表現が自由に展開してきていることなどが、様々な問題点や課題を引き起こしてきたことは前章で述べた。これらは第47回大会をみる限り、改善されてきつつある。新しく全国大会を開催したこと、障害者のチームが参加しよさこい鳴子踊の幅が大きく広がったこと、世代的にも高齢者のチームが参加してきたこと、などに表れている。

1998年に高知新聞は2面にわたって「読者からのお便り特集～WE LOVE YOSAKOI!」を組み、祭りへの熱い提言、苦情、激励、応援、批判を掲載した。よさこい祭が高知市民を中心とした地方都市で大きく花開いて進化しているのは、率直な市民・県民からの多様な意見を集約し、総括をし、新たな糧として歩んできたことに負うところが大きい。^(註-31)

そもそも、よさこい鳴子踊は、南の民の踊り、黒潮の流れに組する民の踊りといえるのではないか。諸説・異論はあるだろうが、南西諸島の踊りと阿波踊、よさこい鳴子踊の共通点は、群舞・乱舞・即興性、そして自由性・開放性であろう。よさこい鳴子踊に即興性がないと見られがちだが、毎年、音楽・地方車・衣裳・踊りを新調したパフォーマンスは、即興の域に近い。また、手を挙げる、その時に脇の下を解放することは、いわば人間にとって無防備な姿である。その姿をとる踊りは、まさに心底から自由で開放的に自己表現と他者への表現を行なっている姿である。南の民は「自分の生命は船底板一枚」といった漁師の心意気の伝統に支えられている。

本稿作成においては高知商工会議所部長澤本彰夫氏、高知県立図書館、高知市民図書館から資料の提供を受けました。ここに感謝を申し上げます。

〔日本学術振興会科学研究費（基盤(C) (1) 『エイサー・阿波踊・よさこい祭における民謡・民俗芸能の継承・伝播・創造の現代的展開』研究代表者：岩井正浩）助成研究〕

[註釈]

1. 1987年より実施している共同調査・研究。その成果は神戸大学発達科学部研究紀要に8回にわたり共著掲載。また「四万十川上・中流域のくらしと音楽序説」(『日本の音の文化』第一書房 1994 pp.235-260) にも岩井が執筆
2. 岩井正浩「地域文化の伝承と創造」(『音楽教育学の展望Ⅱ・上』音楽之友社 1991 pp.113-128)
3. 高知新聞 1995.12.8
4. 岩井正浩「村おこしと民俗芸能」(『現代と音楽』東京書籍 1991 pp.40-63)
5. 『よさこい祭り40年』よさこい祭り振興会 1994 p.10
6. 前掲註5、pp.2-4
7. 前掲註5、p.5
8. 『よさこい読本-2号』高知商工会議所青年部 よさこい祭り振興会 1993 p.30
9. 『よさこい読本-1号』高知商工会議所青年部 よさこい祭り振興会 1992 pp.21-22
10. 前掲註5、p.12
11. 前掲註5、p.12
12. 岩井正浩「音楽行動としての祭り～現代人の＜癒し＞行動」神戸大学発達科学部研究紀要5-2 1998 pp.101-116
13. 前掲註5、p.13
14. 『よさこい読本-3号』高知商工会議所青年部 よさこい祭り振興会 1994 pp.8-11
15. 高知新聞 1996.8.7
16. 前掲註15
17. 『よさこい読本-7号』高知商工会議所よさこい祭り振興会 1998 pp.82-83
18. 前掲註14、p.12
19. 前掲註17、pp.86-87
20. 前掲註15
21. 前掲註17、p.88-89
22. 前掲註14、p.15
23. 前掲註15
24. 前掲註17、pp.84-85
25. 前掲註17、pp.80-81
26. 高知新聞 1992.8.10
27. 高知新聞 1995.8.13
28. 高知新聞 1998.9.12
29. 高知青年会議所 まちづくり市憲委員会「提言書『よさこい祭り』21世紀への指針～まちとまつりを考える～(1999.11)」の中で、市民の目で見えた『よさこい祭り』の現状について、現状の『よさこい祭り』の問題点について、組織及び運営面への提言、これからの『よさこい祭り』のあるべき姿、を論じている。高知新聞(2000.1.6)にも記事として掲載されている
30. 北川泰斗『街は舞台だ YOSAKOIソーラン祭り』高知新聞社(1996)に、成立過程がドキュメント風に記載されている
31. 高知新聞 1998.12.23

よさこい鳴子踊進化論序説

<表1>

[よさこい祭：出場チーム数] (作成：岩井正浩、2000.10)

『よさこい祭り40年』1994.高知新聞「出演チームの横顔」1983-2000) // 「灼-よさこい進化論」
1998.6/10-11/28 // 「踊る夏-よさこい祭り40年」1993.7/25-8/8) をもとに作成

	チーム数	出演者	備 考
第1回	21	750	1954年。交通規制厳しく街頭流しは中止。
2	30	1600	国勢調査882683人、県人口のピーク、今後減少化続く。審査中止。
3	31	1700	審査復活。
4	42	1800	交通事情により繁華街パレードを規制、審査場中心に。伴奏がレコードから特別編成のバンドや専門の地方車に。
5	47	2200	南国博覧会開催。マンボ調登場。アイデア賞設置。
6	47	2500	テレビ初中継。初の前夜祭。市民祭を一般市民が参加可能な中央公園に変更。南国土佐ブーム。《南国土佐を後にして》大ヒット。
7	42	3200	1960年。観覧席設置。形は自由とし、県外踊り子隊を積極的誘致。本部競演場を市役所から追手筋へ移転。
8	53	3600	日程を4日間に。高松踊や阿波踊など参加。市内を7ブロックに分け前夜祭。
9	48	3200	女性の法被増加。NHK郷土民謡全国大会に土佐電鉄踊り子隊を派遣。高知放送テレビが初の全国中継。
10	43	3500	1963年。台風9号で式典以外は延期。児童福祉施設「子供の家」出場。
11	44	3500	個人賞はメダルを首にかける方法採用。
12	39	3500	「よさこい祭を景気回復の起爆剤」と位置付ける。福祉施設へ慰問。
13	34	3800	先頭賞(先導役)、特別賞(県外チーム)設定。
14	43	4200	市民祭を前夜祭に実施。NHK高知放送局実況中継。
15	49	5000	『龍馬がゆく』で再び土佐ブーム。明治百年を記念した「明治青年隊」出場。
16	58	4800	本部に有料席設置。自由参加の一般市民チームを特別編成。琉球舞踊保存守礼会参加。17カ国の公館員見学。
17	45	4000	1970年。大阪万博に出演。「日本の祭り10選」に選ばれる。武政によるテンポアップの踊りが海外への足がかりとなる。和太鼓をサンバのリズム打つ。
18	44	4500	武政に依頼して改めて<基本の型=曲だけの音楽>を追手筋本部と中央公園で実施。「大銀座祭り」に初出演。
19	43	3500	初の海外、ニース・カーニバル出演。繁藤災害で延期。直進からジグザグ行進と8の字の動きが加わる→以後の踊りに影響。
20	63	5500	1973年。ニースへ連続出演、武政編曲のサンバ調リズムで。『よさこい祭り20年史』刊行。初参加増える。
21	61	5300	フレスノ使節団チーム参加。県内各地の祭り・行事にも積極参加を決定。
22	61	5400	参加自由の高知市民憲章踊り子隊編成。
23	56	5200	エレキバンド、ブラスバンド伴奏の増加。
24	62	6500	100人以上の大型チームが19。神事をなくした市民祭に。
25	64	6500	県外チームは13。追手筋の先導車の独自の演奏復活、大音量の伴奏合戦展開。
26	64	6500	<多様化>に賛否両論、高知新聞「激突」欄で。

	チーム数	出演者	備 考
27	64	7000	1980年。フレスノからも参加。全チームがバンド生演奏で大音量。
28	64	7000	「児童福祉連合・つくし」が初参加し車椅子でパレード。不況で市旅館組合不参加。570人の「高知子ども会連合」。
29	68	8000	統一音楽であった追手筋本部競演場の踊りが解禁となり自由化に拍車かかる。
30	86	10000	西安市で初の踊り。ロック、サンバ調増加。大音量合戦。
31	91	12000	1983年。高知新聞に「出場チームの横顔」掲載が開始。記念祭典への徳島阿波踊など四国各地の民俗芸能や沖縄チーム賛助出演。
32	106	13000	初出場15。ロックやディスコ調全盛。＜市民の祭り＞から＜県民の祭り＞へ。＜市民祭＞を＜祈願祭＞に。ジャズダンス初登場。
33	111	13000	「県ろうあ協会チーム」初出場。
34	114	14000	龍馬賞(団体)を設置。初出場14。「科学万博」に招待。ジャズダンス風の増加。
35	110	13000	サンバ、ロック調健在。伴奏音楽の大音量に検討プロジェクトチーム設置。県外踊り子隊増加。
36	123	15000	競演場10カ所に。初出場19。アップテンポ主流に、ラップ調、ファンキー風踊り。よさこい振興会が規制を出す①地方車の大きさ4トンまで。②1チーム数150人以内。③競演場以外での音出し禁止。④鳴子を必ず持って前進。後進禁止。⑤曲には必ず《よさこい鳴子踊》を入れる。⑥未成年の踊り子は午後10時まで。⑦ゴミ放置のチームは参加取り消し。⑧地方車の音量測定調査実施(110デシベル超過も)。
37	126	15000	レゲエも登場。初出場18。深夜の大音量で警察出動。ドイツ・ジャパンウィーク参加、以後各国の＜ジャパンウィーク＞に連続参加。
38	137	16200	ユーロビート。初出場18、県外参加18。1チーム150人以内・鳴子を必ず持つ・音量の自己規制・一般市民参加勧誘を改めて確認。節度ある行動の要望。マルセイユ・ジャパンウィーク参加。
39	138	16200	1990年。ランバダ登場。初出場23、県外参加10。男性踊り子の化粧とヘアスタイルの復活。イギリス・ジャパンウィーク参加。
40	144	16500	初出場26、県外参加10。ブラジル・サンバチームが参加。アメリカ・ジャパンウィーク参加。
41	133	15200	よさこい前夜祭に24チーム。レゲエ、サンバ、ソウル、ロック、サルサなど健在。第1回＜YOSAKOIソーラン祭＞。和太鼓導入増加。
42	123	13300	1993年。よさこい前夜祭20チーム。初出場24、県外9。4分の1が企業チームで企業PRの場と化す。
43	123	13500	「記念フォーラム・よさこいシンポ」。正調への回帰現象も。踊りも男性的、情緒的、音楽も定番化したロック、サンバ、デジタルサウンド三味線など多彩。＜よさこいダンスシアター＞で県外客に指導開始。ボディコン・セクシー路線登場。
44	126	14000	初出場9。
45	123	14000	日程が9-12日までの4日間となる。初出場10、県外10。後夜祭で受賞チームの踊りを披露。
46	134	15000	初出場15、県外11。和風回帰、ロック、サンバ調下火に。
47	146	16600	初出場14、県外15。南北連携筋の鳥取県チームが初参加。正調を守り4半世紀出場の「尼崎武善会」が今回で終了。
			初参加16、県外13。
			第1回よさこい全国大会に県外14を含む33チーム出場。障害者チーム「てんてこ舞」初参加。「よさこい“ちびっこ”選手権 in 大阪」開催(吹田市)
			2000年。第2回よさこい全国大会に県外17を含む33チーム出場。

よさこい鳴子踊進化論序説

<表2>

[全国のよさこい祭]

(作成：岩井正浩 2000.11)

『よさこい読本9号』2000年//高知新聞「鳴子文化圏をゆく」1998.6/10-26)

(*印は朝日新聞「よさこい鳴子踊を取り入れた祭り」 1999.6.17)・他で作成

	<開催地>	<開始年>	<開催日>	<備考>
YOSAKOI ソーラン祭	(札幌市)	1992	6/7-11	
ぼんぼん祭りと冬祭	(北海道北見市)	1996		
恵庭すずらん踊	(北海道恵庭市)	1973		
YOSAKOI ほろろん祭	(北海道阿寒町)	1996		《丹頂鶴音頭》
ヤートセ秋田祭	(秋田市)	1998		《秋田音頭》
YOSAKOI さんさ	(盛岡市)	1998	9/11	
村山徳内まつり	(山形県村山市)	1995		
どんGALA祭	(新潟県柏崎市)		8/26	
みちのくYOSAKOI 祭	(仙台市)	1998	10/7-8	
小鶴商店街よさこいまつり	(茨城県茨城町)	1997	7/20	地元伝承の踊りをアレンジ
あさか・彩夏祭(朝霞市民祭)関八州よさこいフェスタ	(埼玉県朝霞市)	1994		《朝霞音頭》と《よさこい節》
新松戸まつり	(千葉県松戸市)	1996	7/25	
東京よさこい祭(大高田馬場祭)	(東京都新宿区)	1997	10/10	
ODAWARA えっさホイおどり	(神奈川県小田原市)	1999	7/29-30	
ZAMA・燦夏(さんか) 祭	(神奈川県座間市)	1998	8/30	
よさこいひょうたん踊大会	(神奈川県大井町)	1996		
相模台夏まつり	(神奈川県相模原市)	1981		
ヨコハマカーニバル(ハマこい踊)	(横浜市)	1998		
能登YOSAKOI かいかい祭	(石川県七尾市)	1997に導入	8/4-5	《和倉音頭》をサンバ調にアレンジ
ぬまづダンスフェストよさこい沼津	(静岡県沼津市)	1997	11/11-12	
掛川商工まつり	(静岡県掛川市)	1994より導入	11月上旬	
美濃源氏七夕まつり	(岐阜県瑞浪市)	1998		
にっぽんど真ん中祭	(名古屋市)	1999	8/18-20	
津まつり	(三重県津市)	1998		
ござれGO-SHU	(滋賀県甲賀町)	1999	8/5	
京都まつり	(京都市)	1996		
バサラ祭	(奈良市)		8/25-27	
Yosakoi ソーリャ!開墾祭	(大阪府貝塚市)	1998	8/21-22	
箕面まつり	市立貝塚第5中学校体育祭(1997)で「泉州のだんじり祭」・「鳴子踊」・《ソーラン節》を融合 (大阪府箕面市)	1998	8/8	
第16回交野まつり	* (大阪府交野市)		8/8	
こいや祭	(大阪市)		8/26-27	
第26回堺祭	* (大阪府堺市)		10/17	
よさこいちびっこ選手権	* (大阪府吹田市)		11/3	
よさこい in 泉大津	* (大阪府泉大津市)		7/18	
大阪メチャハッピー祭	(大阪市)	2000	11/3	
第29回神戸祭	* (神戸市)		7/20	
KAKOGAWA踊っこまつり	(兵庫県加古川市)	1999		
神戸垂水よさこいまつり	(神戸市)		7/23	
城崎温泉YOSAKOI 祭	(兵庫県城崎町)		7/7-8	
がいな祭	(鳥取県米子市)	1997		
よっしゃこい祭	(広島県呉市)	1998	7/31	
銭形まつり踊コンテスト	(香川県観音寺市)	1996		
よさこい祭	(高知市)	1954	8/9-12	
あらお荒炎祭	(熊本県荒尾市)	1997		
夢・泉・郷 BEPPUドリームバル	(大分県別府市)	1997		

<表3>

[第47回における本祭参加県外チーム] (作成：岩井正浩 2000.10)

チー ム 名	回数	備 考	人数
さあさよっちょれおどろよチーム	9	YOSAKOIソーラン参加のメンバー	150
さぬき踊らんな連	7	香川県琴平町	100
東京土佐寮	28	県出身の東京の大学生連合チーム。オリジナル曲によさこいをミックス	100
近畿大学高知県人会	21	浪速、やっこさん、よさこいが合体	50
尼崎高知系県人会・よさこい近松隊	2	アップテンポな踊り	45
よさこい沼津「FUJIYAMA組」	初	「よさこい沼津」の連合チーム	50
関西地区大学連合	32	「不景気をぶっ飛ばせ」がテーマ	120
京都チーム「櫻嵐洛」	2	関西の大学生と社会人が中心のチーム	50
北海道高知県人会	4	道産子チーム。《ソーラン節》をメインにした曲と踊り	15
九州大陸	初	九州在住の学生チーム	100
北海道大学<緑>	初	北大生を中心としたチーム	80
知的障害児ももぞの学園チーム	初	岡山市	70
ひめじ良さ恋まつり実行委員会	初	8月27日に初のよさこい祭を姫路市で開催	50
鳥取県よさこい踊り子隊	4	テーマは「大山」。僧兵太鼓で男っぽく勇壮に	84
東京私学六大学連合	40	伝統の重さを感じつつ学生らしく踊る	100

<表4>

[第2回全国大会参加チーム] (作成：岩井正浩 2000.10)

チー ム 名	開催地	備 考	人数
wamiles 踊り子隊美翔女	札幌市	昨年まで2年連続で本祭出場	70
パスキー北海道医療大学	札幌市	クレジットリース会社と学生混成チーム	100
みちのくYOSAKOI合同チーム「RIKU-六陸」	仙台市	社会人と学生混成チーム	44
サンガ・めだかつちゃっ	石川県七尾市	「YOSAKOIいかい祭」大賞受賞	40
TOKYO 夜さ来いCOMPANY	東京都	20-30代の社会人中心	40
海老名商工会議所婦人会えびな桜舞会	神奈川県海老名市	来年海老名市でよさこい導入の祭り企画	
イキ・粋なかみせ鳴子隊	静岡県沼津市	「よさこい沼津」で2年連続大賞受賞	40
名古屋学生チーム鯨	名古屋市	「日本と真ん中祭」の代表	50
京都チーム「櫻嵐洛」	京都市	学生と社会人混成チーム	55
夢舞隊	大阪府貝塚市	貝塚5中が体育祭に導入したことが契機	40
Team Kinki SASSO!	大阪府箕面市	6-62才の年齢層	46
加古乃花舞	兵庫県加古川市	「KAKOGAWA踊っこまつり」の混成	70
吉備国祭衆うらじゃ	岡山市	「うらじゃおどり」の有志	80
くれ・よっしゃこい踊り子隊	広島県呉市	「よっしゃこい祭」の一般公募	40
さぬき踊らんな連	香川県琴平町	本祭7回、全国大会2年連続参加	68
あっぱれ青組	長崎県佐世保市	今年から「YOSAKOI佐世保祭」	50
阿蘭陀400 させば隊	長崎県佐世保市	佐世保市政百年で一般公募	140